

# Discover Your Amazing Study at an Amazing University

おもしろい大学 ● 富山大学の情報誌 トムズプレス | March 2025

⑥

き な り ば れ



## 富山大学へのご寄附のお願い

日頃より富山大学の教育・研究・社会貢献にご理解をいただき、また、格別のご支援賜りまして深く感謝申し上げます。富山大学のさらなる飛躍のために、富山大学基金を初め、特定基金（修学支援、研究等支援、課外活動支援、各学部基金）や附属病院等への募金へのご支援、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

### 大学全体を支援したい



#### 一般基金

留学支援や施設整備等、大学の活動を広く支援する基金です

### 特定の部局を支援したい



#### 医学部基金

教育施設の整備等、医学部の教育・研究に支援を行います



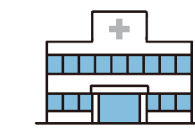
#### 工学部基金

創造工学センターをはじめとした、工学部の教育・研究に支援を行います



#### 経済学部基金

経済学部の教育・研究に支援を行います



#### 附属病院支援基金

高度な医療を提供するための教育・研究施設整備等を行う基金です



#### 芸術文化学部基金

芸術文化学部の教育・研究に支援を行います

### 学生を支援したい



#### 修学支援基金

被災した学生等、経済的理由により修学が困難な学生に支援を行います



#### 課外活動支援基金

学生の人間形成の場の一つである課外活動の支援を行います

### 研究を支援したい



#### 研究等支援基金

学生または不安定な雇用状態にある研究者の研究活動等に対し、支援を行います

### 特定の教員や学部・学科・講座等を支援したい



#### 寄附金制度（学術研究・産学連携本部）

教育研究の奨励を目的とする寄附金を受け入れる制度です

ご寄附のお申し込み、お問い合わせは富山大学広報・基金室にお願いいたします。  
〒930-8555 富山市五福3190 TEL 076-445-6178 FAX 076-445-6063  
E-mail:kikin@adm.u-toyama.ac.jp  
URL:<https://www.u-toyama.ac.jp/donation/>





地域の人々との深いふれあいが、  
医療者としての  
本質的な学びにつながる。

富山大学医学部では、学生たちが主体となり、地域社会と連携した活動を行っている。成果を測定可能な形で示す取り組みは、学生たちの成長と地域貢献の両方につながっている。その背景には、高村昭輝教授がこれまで教育現場のサポートや地域医療などで得た実践的な経験、オーストラリアの大学で体験した医療教育現場での貴重なキャリアなどが活かされている。

## 学生がテーマを決めて実践、教授がサポートする。

私たちの「医学教育学」という講座は、側から見ると「一体何をやっているのだから？」とわかりづらい部分があると思います。研究としては、「医療者教育」に関わるものはすべて「私たちの領域に入ってきます。社会医学は色々な社会の現状を実際に地域で学ぶことも教育の一つで、医学教育学講座の研究テーマとして、十分成り立ちます。

私たちの講座では学生が主体的になり、活動内容についてはすべて学生が決めていきます。それをただの活動で終わらせず、どうやって測定可能な成果として、社会に示せる形にするのか、その部分を私たちが支えるというスタイルです。

学生たちが「これをやりたい」と言って始めた活動を基本的にそのまま尊重し、彼らが進めていく中で例えば、「こういうことを測りたいけど、どう評価したらいいのか?」、「この成果をどうやって形に残せばいいのか?」といった相談を受けたときに、私たちはその問いに対するアドバイスを行っています。

富山大学の医学部医学科には「研究医養成プログラム」という3〜4年生を中

心としたプログラムがあります。このプログラムは様々な要件を満たした場合、大学卒業後に医学博士を取得する大学院の課程を、4年から3年に短縮できるシステムで、同じ研究目的を持つ学生たちが集まり、地域社会と連携した活動を行うチームという感じで参加しています。

## 地域とのつながりを深めながら学ぶ、そのプロセスが大切。

学生たちが日々の学びを活かして、「地域の人たちのつながりを作るためにどう貢献できるか」と考え、いろいろなアイデアを出し合って、中には高校生向けに塾を運営している医学科の学生もいます。

また、ある学生グループでは、地域の高齢者向け健康相談会を企画しました。このプロジェクトでは、高齢者の健康状態や生活習慣についてデータを収集し、そのデータを分析して次の活動に役立てるという流れを作り上げました。この過程で、私たち教員がデータ収集の方法や分析の仕方についてアドバイスをを行いました。結果的に、この活動は学生たちの学びにつながっただけでなく、地域住民にとっても有益なものとなりました。

こうした取り組みは、単にデータを収集して終わらせては意味がありません。地域住民へのフィードバックを得て、それを次に活かす形にすることも大切です。学生たちは、このような実践的な学びの中で、コミュニケーション能力や課題解決能力を高めています。

学生たちが主体的に動き、地域とのつ

ながりを深めながら学ぶ。このプロセスそのものが彼らの成長につながっているのです。また、学生たちはこうした活動を通じて、地域社会に対する責任感や自らの行動が社会にどのような影響を及ぼすのかを考える力も養っています。

地域そのものを、教育の場として捉えていて、特に富山大学の医学部では、1年生から地域医療の現場での実地体験をカリキュラムに取り入れています。学生たちは、地域の診療所や介護施設を訪問し、住民と直接関わることで、理論だけでは得られない学びを体験しています。

## 「漢方カフェ」が新たな「コミュニティ」の場を創出する。

いま私たちが取り組む活動としては、大学コンソーシアム富山の「学生による地域フィールドワーク研究助成」で令和5年、6年度の採択事業として、「漢方カフェ」というプロジェクトを実施しています。令和5年度は、採択事業の中で最優秀賞を受賞しました。

「漢方カフェ」は、砺波市の榎野地区という75歳以上が人口の2割を占める少子高齢化の顕著な地域で、廃幼稚園を利用したカフェを毎月一回開催しています。この活動には医学部、薬学部の学生が主体となって、月替わりのフードメニューを提供し、地域住民に漢方の基本的な知識を伝えたり、健康相談を受けたりする場を設けています。地域住民の方たちに外出するきっかけを与え、新たなコミュニティを創出し、健康意識を高め



漢方カフェ営業の様子

る機会となりました。

最初は半信半疑だった参加者の方も、数ヶ月が経った頃には、毎月このイベントを楽しみにしてくれているのが、参加者数や売上にも表れていますし、喜んでもらっていることは間違いないと思います。毎月参加される方は学生の顔を覚えて、毎回いろいろな相談をしてくれるようになってきています。



高村 昭輝 教授  
(たかむら あきてる)  
学術研究部医学系  
医学教育学講座 教授

1972年(昭和47年)生まれ/1998年富山医科薬科大学医学部医学科卒/2008年南オーストラリア州立フリンダース大学教育学修士課程修了/2018年三重大学家庭医療学講座で学位(医学)取得。医学部卒業後、一般市中病院で勤務し、小児科専門医を取得。留学後はラオス、ベトナム、タジキスタン、モンゴルなどで医療者教育の仕事に携わり、現在は医療者教育と総合診療の二足の草鞋を履きながら、医療者教育資源としての地域を研究課題として後進の育成を楽しんでいる。

## 病気を窓口に、その人の人生も含めて 全体を見られる視点が大事。



朝日町でのフィールドワーク調査

や視野を広げる重要性を目の当たりにしてきました。それを少しでも富山大学の学生たちに落とし込みたいという思いは根幹にあるかもしれません。

### 県境を越えたサマースクールで 医師不足の課題に向き合う。

「サマースクールin朝日町」は、文部科学省が推進する「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点事業」の一環として実施されている取り組みです。この事業は、将来的に医療人材を育成するために適切なカリキュラムを提供できる大学や教育機関に対し、事業費が支給されるもので、条件として複数の大学が連携してカリキュラムを構築する必要があります。

今回のプログラムでは、特に富山県と新潟県の県境地域、いわゆる呉東地域から糸魚川・上越地域までの医師不足が顕著なエリアに焦点を当てました。富山大学と新潟大学が連携し、この地域で将来



住民と医学生による町の将来を考えるグループワーク

また、園庭で田植えをするイベントやクリスマスマーケットなど、地域のイベントとコラボすることで親子から高齢者まですべての世代が集まる場になったことから大きな意味があったと言えます。ただ、私たちの研究としては、単に参加して楽しかったとか、満足だったで終わらせずに、それが次の外出する勇気や、健康診断の受診率が上がるといったポジティブな成果につながってほしいと願っています。

学生にとっては、住民の生の声を聞き、それに応える経験を積む場となっており、日々授業で学んでいることをアウトプットするということは、学びを深めることにも大いに繋がっています。さらに、このプロジェクトでは地域特有の食文化や生活習慣が健康に与える影響についても学ぶことができました。

### 地域と学生が双方向に学び合い、 新しい視点が生まれる。

活動を通じて得られた知見やデータは、学生自身の報告書や次の世代への引き継ぎ資料として形に残されています。これによって活動が一過性のものならず、持続可能な学びの基盤として活用されています。

「地域と学生が双方向に学び合う」とで生まれる新しい視点が、次の活動へとつながっていきます。学生たちは地域住民との交流の中で、単に健康を教える側だけでなく、住民から学ぶ姿勢も養われています。こうした経験が、地域社会に貢献できる医療者としての基盤を築く一助となっていると実感しています。これらの成果をもとに、梅檀野地区だけでなく、今後は県内のあらゆる地区で広がっていく準備をしています。

### SDHをテーマに、 社会的要因と健康を考える。

SDH（ソーシャルデターミネンツオブヘルス）とは、教育や所得、生活環境など健康に影響を与える社会的要因を指しています。このテーマに基づいて、富山大学の学生たちは地域で多くのプロジェクトを展開しています。

例えば、あるプロジェクトでは、地域住民の健康状態を調査し、教育水準や収入が健康に及ぼす影響をデータとして収集しました。さらに、そのデータをもとに住居的に活躍できる医療人材を育成するためのカリキュラムを作成し、この事業に応募して採択されました。

具体的な取り組みとしては、地域枠と呼ばれる枠組みで入学した学生を対象にしています。この地域枠の学生は、卒業後に富山県内または新潟県内で一定期間（富山県の場合は9年間）勤務することが条件となっています。この枠で学ぶ学生、特に3年生の学生たちを中心に、毎年夏にフィールドワークを実施しています。2022年度には上越市で、2023年度には朝日町で活動が行われ、学生たちは両大学の共同プログラムに参加しています。

### 新潟大学との連携で得られる 効果とは。

朝日町での取り組みは、地域住民との直接的な交流を通じて、地域の実情を理解し、将来の医療ニーズや地域の課題に対応する力を養うことを目的としています。今回のフィールドワークでは、例えば「将来、歳をとったときに朝日町に戻ってくるとしたら、どのようなリソースが必要になるか」というテーマをもとに、地域住民と意見を交わしました。この活動は、地域の医療に必要な条件を具体的に考えるきっかけとなり、地域医療の課題解決に向けた視点を養う重要な経験となっています。

このように、フィールドワークを通じて地域を深く理解することは、学生たち

民に合った健康管理プランを提案する活動を行いました。この取り組みは、住民自身の健康意識を高めるだけでなく、学生たちにとっても、データを活用して具体的な改善策を考える貴重な学びとなりました。

COVID-19のパンデミック下で、感染対策が地域住民の健康意識や行動にどのような影響を与えたのかを調査した結果があります。住民間での健康格差が浮き彫りとなって、対策の必要性を明確にするデータが示されています。

地域住民と一緒に課題に向き合いながら学ぶプロセスこそが、学生たちの成長を大きく後押ししています。このようなプロジェクトを通じて得られた知見は、学生たち自身の成長だけでなく、地域社会全体の健康増進にも寄与しています。

さらに、これらのデータは学術的な論文として発表されることもあり、地域医療の改善や政策提案につながるケースもあります。このように、SDHをテーマにした学生の活動は、教育だけでなく社会への影響力も大きいものとなっています。

### オーストラリアの大学では 地域に一年滞在して臨床実習。

私自身、これまで国内外で、地域との学びを重視した医療教育の現場を経験してきました。特に印象的なのは、オーストラリアでの「地域基盤型医療者教育」の中の、過疎地域における医療者教育の実践

が将来的にどの地域で働くにしても、病院の外に出て情報を収集し、医療活動に活かす力を身につけるための有意義な学びの場となっています。新潟大学との連携によるこの取り組みは、県境を越えた地域の医療人材育成において、新しいモデルとしての可能性を示しています。

### 患者の人生や価値観も想像できる そんな医療者になってほしい。

地域での学びは、学生が医療者として患者を包括的に理解する力を養うために欠かせない私は考えています。単に病気を診るだけでなく、患者さんがどのような生活を送り、どのような社会的背景を持っているのかを理解する必要があります。その人のライフスタイルとか、家族のこと、これまでの人生や価値観なんかもちゃんと想像できる、そんな医者になってほしいと思っています。病気を窓口、その人の人生も含めて全体を見られる視点を持つことが大事だと思うので、こういう観点を身につけるのはすごく良いことだと思います。

富山大学では、4年生以上になると地域医療の現場での長期実習が行われます。ここでは、学生たちが地域住民と直接触れ合いながら、在宅医療や訪問診療に参加する機会が与えられます。たとえば、高齢者の家庭を訪問し、健康状態を確認するだけでなく、その人の生活環境や家族構成を考慮した支援を行う方法を学びます。

でした。こうした地域には労働者が集まるため、病気やけがを抱える人々が必然的に発生し、医療の提供が欠かせない一方で、多くの医療者が田舎で働くことを避ける傾向があり、医療提供体制の維持が課題となっていました。

オーストラリアの大学では、この状況を改善するために、将来的に過疎地域で短期間でも働いてくれる医療者を育成する教育プログラムを実施していました。そのカリキュラムの特徴的な点は、学生が1年間丸ごと田舎に滞在し、地域の小規模病院で臨床実習を行うというものでした。

学生は地域の医療現場で実践的なスキルを磨きながら、医療チームの一員として戦力になる経験を積む。法律上、医学生が許される範囲の制約はあるものの、指導医の監督下で可能な限りの業務を担当することが出来ます。特に、大学病院では限られている学生の役割が、中小病院では大きく広がり、学生自身が実際に地域の医療に貢献できる実感を得られる仕組みとなっています。

こうした環境は、学生の自己肯定感を高める効果があり、大学病院では、学生は最も下位の立場に置かれ、できることが限られる一方で、地域の病院では「頼られる存在」として扱われる。その結果、学生たちは「自分にもできることがある」という自信を持ち、医療者としての責任感や能力を自然と身につけていくことができます。学生が大学の外に出て地域と関わることで、医療者としてのスキル



## The Amazing Report

高岡市吉久まちづくりプロジェクト

～よっさまちづくり会議について～



建築もまちづくりも、  
実践して究める。  
だから、まちに出よう。

### 藪谷 祐介 講師

(やぶたに ゆうすけ)

富山大学学術研究部芸術文化学系 講師

1986年三重県生まれ。筑波大学大学院博士前期課程修了。札幌市立大学大学院博士後期課程修了。博士(デザイン学)。一級建築士。(株)河野正博建築設計事務所、札幌市立大学特任助教を経て2018年より現職。専門は建築計画・コミュニティデザイン。コンテクストの特性を読み解き人と空間と時間の再構築を試みる「建築的思考」から、いかにコミュニティに創発性をもたらすのか探究している。

富山大学芸術文化学部藪谷研究室では、「良いコミュニティを育むために建築にできることは何か」をテーマにまちづくりに取り組む。学生は地域をフィールドにしたさまざまなプロジェクトを通して、建築とまちづくりを心と体を動かしながら学んでいる。そこ自身にスキルは実践力、マネジメント力、コミュニケーション力と無限大だ。学生たちは時に失敗をしながらも、まちと人というリアルの中で成長していく。地域に出て学ぶことの面白さ、そのかけがえのなさを藪谷祐介講師に聞いた。

人の暮らしがある場所は、すべてまちづくりの研究フィールドになる。

建築やコミュニティデザインを学ぶ学生に、僕がいつも伝えているのは地域に出ていって学ぶことの大切さです。私の研究室では自治体や企業、地域のさまざまな方々と協働して、建築やまちづくりに関わるプロジェクトに取り組んでいます。

その一つが高岡市吉久を舞台とした「よっさまちづくり会議」です。吉久は2020年に国の重要伝統的建造物群保存地区(重伝建)に選定されたまち。以前からまちづくりが熱心に行われていたが、担い手の高齢化が課題でした。同プロジェクトはまちづくりの新たな担い手の発掘を目指し、富山大学、吉久まちづくり推進協議会、NPO法人吉久みらいプロジェクトなどが連携して行う連続ワークショップとして2021年にスタートしました。

## 漢方カフェを支える学生たち、 二人の想いは受け継がれていく。



継続的に交流することの  
重要性を実感。

宮澤 「漢方カフェ」を始めたのは、地域医療に関心があったからです。過疎地域の住民が健康相談を気軽にできる場所を作りたくて、私と薬学部と同級生が中心となって、3年前にスタートしました。

はじめは、自分たちの医療への興味や知識という強みを活かして、健康相談をきっかけに交流する場を作りたいと思っていました。しかし、実際に始めてみると「相談に乗ってあげる」ことよりも、教わることのほうが多くて、地域の方と対面で継続的に交流することの重要性を実感しました。

宮寺 私がプロジェクトに関わるようになったのは昨年からです。薬学部に進学した理由の一つが、漢方について興味があったからでした。「漢方カフェ」の活動の紹介を見て、自分の学びたいこととマッチしていて面白そうだなと思いました。実際の現場に見学に行くと、先輩方が地域と深く関わりながら実践的に学んで

いる姿を見て、「これは自分も本格的に参加したい！」と感じました。

宮澤 大学教員の医師に相談し、自治振興会の方に宣伝を手伝ってもらいながら、少しずつ進めていきました。また、カフェとして機能させるためには、場所の選定や資金調達も必要でした。当初は少人数でのスタートでしたが、少しずつ賛同者が増え、やっと形になってきました。

宮寺 先輩方が築いてきた信頼関係があったからこそ今の活動があると感じています。私もその信頼を大切にしながら、地域イベントなどにも積極的に関わること、若い世代や子育て世代にも広がりを持たせたいと思っています。

生活者の症状を  
想定して薬膳茶を作る。

宮澤 カフェでは、薬膳の知識を活かしたお茶や軽食を提供しながら、利用者の方々が健康について気軽に相談できる場を作っています。例えば、「最近疲れやすい」といった相談に対して、生活習慣の相談に乗ったり一緒に漢方について調べてみたりすることもあります。また、症状を想定した薬膳茶を作り、その場で試してもらえるよう工夫しています。

大学で学んだ知識を、言語化して実際に困っている方に伝えるという作業は自分たちにとってすごくプラスになりますし、地域の方にとっても、リラックスしながら話せる場所になっている。お互いにとって良い効果が生まれていることが何

よりうれしいです。

宮寺 私が印象的だったのは、利用者の方々から「ここに来ると安心する」という言葉をいただいたことです。ただ、若い世代へのアプローチがまだまだ課題です。SNSでの発信を始めましたが、それだけでは十分ではないと感じています。加えて、メニューの多様化や地域の特産物を活用した新商品開発も必要だと思っています。

宮澤 SNSは重要ですが、地域の電子回覧板やイベントでの告知も効果的でした。地元のイベントと連携し、互いを紹介し合うことで、両方のお客さんが増えるという相乗効果もありました。カフェに足を運んでくれる人が少しずつ増えました。また、常連さんとのつながりが強まることで口コミ効果も期待できています。

宮寺 私たち薬学部生としては、若者にも興味を持ってもらえるよう、地元の食材を使った薬膳茶や、新しいレシピの開発に取り組んでいます。また、食べることが楽しみにするような薬膳料理の提案も行っています。たとえば、地元産の梅や山菜を使ったオリジナルメニューを考案しました。

人と人をつなぐ場で  
あり続けられるように。

宮澤 これから中心となる宮寺さんたちの次世代が、「漢方カフェ」をさらに発展させてくれると信じています。この活動を



通じて、地域医療が「人と人とのつながり」で成り立っていることを実感しました。カフェがそのつながりを生み出す場になれたらうれしいです。特に、顔を覚えてもらえる常連さんが増えたことは、この活動の成果を感じる瞬間でした。

宮寺 私も、このカフェが「人と人をつなぐ場」であり続けられるよう頑張ります。先輩たちが築いてきたものを引き継ぎながら、新しい試みをどんどん取り入れていきたいです。

「漢方カフェ」は、料理を提供するといっただけでなく、お客様との対話の時間を大切にしているので、限られた人数でより良い対応をできるように模索しています。



よっさまちづくり会議



高岡市吉久



空き地を活用した「よしひさえん」

人文社会芸術総合研究科  
2年  
重山隼人さん

吉久に住みながら、よっさまちづくり会議や、よしひさえんの企画・運営に携わり、多くを学びつつ、地域や人とのつながりの形成に貢献できたことを大変嬉しく思います。



学生シェアハウスの改修

芸術文化学部 藪谷・田邊両研究室の学生がファシリテーターを務め、吉久まちづくり推進協議会や自治会、住民の方と一緒にまち歩きをして資源を発掘、マップ上で整理。それを元にまちの魅力や課題を語り合い、「吉久をこんなまちにしたい」というビジョンを共有しました。その後、「空き地」「空き家」「通り・軒下」の活用という3つのテーマを設定し、学生と地域の方がチームをつくって活動の企画や実践、検証を重ねてきました。

**住む人のスキルを発揮する場があれば、まちは生き生きと輝く。**

重伝建に選定されるとまちはカタチとして残ります。しかし、まちはハードだけ残そうとしてもダメ。住んでいる人がいないと建物の維持もできない。まちを持続させるには人の暮らしと生業が必要で、そうしたのが見えてくることで、まちの生き生きとした景観が生まれます。ハードとソフトの両方が重要で、私たち

は主にソフトのサポートに努めました。例えば空き地を活用したコミュニティガーデン「よしひさえん」は、学生と地域の人アイデアやスキルをシェアしながら作りました。屋台づくりでは地域の職人だった方が「削りが甘い」と頼んでいないのに学生にカンナの使い方を直々にレクチャーしてくれたりも。スキルを貨幣に換えて交換する今の資本主義社会では、そんなふうになんか地域の中で技術や経験を発揮できる場が減っています。住む人が活躍できる場があれば、まち全体が生き生きとしてきます。それに吉久はコミュニティが元々しっかりとある場所。学生や住民が個々のスキルを活かし合うことで、これまでにない新しいつながりや、異なる世代の出会いが生まれていきました。

よっさまちづくり会議のゴールは「まちを育てるプラットフォーム」として開かれた場をつくり、まちづくりにおいて固定化している人を循環させることでもありました。まちづくりではいろんな意

見があつて当然で、中には前向きじゃない人もいます。多様な考えを持つ人が気軽に参加しやすいさまざまなカタチを模索しました。それはまちに潜在するニーズと資源、プレイヤーをマッチングし、人が活躍できる「舞台づくり」のようなもの。個々のアイデアやスキルが小さな活動を通してまちに定着し、まちの中で新たな役割を獲得する。それらが有機的につながること、まちの大きな変化に結びつくことを目指しています。

こと。サインは歴史的事実だけを示すのではなく、地域の出来事や人々の思い出を紹介し「まちの暮らし」が見えてくるものを目指しました。住む人のまちへの愛着を育み、観光客にも住民自身の言葉で説明できるものがないと。他の研究でまちへの愛着が住む人のウェルビーイングを高めることがわかってきた。吉久のまちを訪れた人が「このまちってなんか楽しそう」とまちを好きになり、移住者が増えることでまちの持続性にもつながっていきます。

**住宅の改修を学生の生きた教材に。『セルフリノベーションの教科書づくり』**

「生きた教材」として住まいの改修にも挑戦しています。僕は三重県出身で、札幌から富山県にやって来ました。自然豊かな氷見市久目に移り住んだのは、「土の上で子育てがしたい」と思ったから。久目には集落の美しい景観があり、それを支え

ているのはここに住む人の暮らしと生業。景観を持続させていくためにはここに多くの人に住んでもらう必要がある。建築家にできることとして「地域に開いた家のあり方」を模索し、古い住宅を改修して住むことにしました。それが山川藪文庫です。住宅を外に開いたものにするため、1階の2つの和室を減築し、外から入りやすい半屋外空間に。地域とゆるくつながる中間領域として、ここでマルチやコンサートを開いています。

改修プロジェクトでは地域の方から木材や土を提供いただき、また経済学部など垣根を超えて多くの学生が参加してくれました。建築を学ぶ学生にとっても、実際の施工に関わる機会は貴重です。学生たちは解体、塗装、左官、壁や三和土土間の施工技術を職人に教わり、知識と技術

**つぎあい方で叱られたり。地域みんなで育ててもらっている実感がすごくある。**

まちづくりのプロジェクトで大切にしたいのはやはり学生と地域の人の協働です。学生だけでも何かしら活動はできる。しかし、プロジェクトが継続し発展するためには、学生やまちの人がしたいこと、それぞれのスキルを活かすこと、まちが望むこと、この3つを融合させることが大切。そこに生まれるのは「創発性」です。互いに響き合うことでまちの人にも主体性が生まれ、学生が入れ替わっても活動を積み重ねていける。これまで到達できなかった所までプロジェクトは発展して

いける。地域で学ぶもう一つの良さは、地域の風習や人とのつぎあい方を学べること。活動の中で学生たちは結構怒られちゃうんですよ(笑)。この間も吉久で学生たちが空き地の草刈りをして草を積んで置いたら、風の強い日に飛ばされて散らかってしまった。地域の皆さんが片付けてくれたのですが「放ったらかしにしたらだめよ」と叱られていました。「報連相」一つとっても、自分たちと地域の常識ではギャップがあると肌で知る。地域の人も学生のことを思っていて注意してくださる。そんな人との関わり方は大学の中にいたら学べない。学生たちには現場で様々なことを実践で学んでほしい。僕自身もいろんな失敗をしながら地域に育ててもらったので。

先端的な課題はいつも地域社会の中にあります。建築やまちづくりは大学に籠もっていても何も見えてこない。地域に出ていってこそ、そこにある課題を高い解像度で理解できる。そして、そこで実践するからこそフィードバックが得られ、深い学びや探究につながる。

今、地域のみなさんに学生を育ててもらっている感覚がすごくあるんです。学生自身、まちへの愛着が育てば定住にもつながるし、富山じゃなくても新しいまちと関わる力になる。まちや人に関わるスキルは、いろんな地域を良くしていくためのすごく重要な力です。まちづくりの方法も正解も一つじゃない。それぞれのカタチで見つけていってくれたらと思います。



山川藪文庫<sansensoubunko>の平屋外空間



山川藪文庫<sansensoubunko>マルシェ開催

## The Amazing Interview

スポーツ社会学・スポーツマネジメントと  
地域社会との関わり



スポーツで社会を元気にする、  
スポーツにはまだ  
いろんな可能性がある。

Q スポーツ社会学やスポーツマネジメントとはどういうものですか？

スポーツ社会学とスポーツマネジメントは、私の研究と教育の中心にある分野です。スポーツ科学全体を考えると、多くの人が速く走る、遠くに投げるといった自然科学的な側面を思い浮かべると思いますが、私は社会科学の視点からスポーツを研究しています。

具体的には、スポーツ社会学では、スポーツを通して社会を理解することを目的としています。たとえば、部活動の地域移行という話題がありますが、これは単に部活を学校外に出す話ではありません。

スポーツが社会や地域に与える影響を深く探求するスポーツ社会学。神野賢治准教授は、地域のあらゆるスポーツシーンを視野に入れ、スポーツがもたらす社会・経済効果を研究。学生とともに地域課題を解決する活動を展開し、スポーツを基盤とした新たな社会の在り方を模索している。

教師の働き方改革や少子高齢化など、社会全体の課題が浮き彫りになります。「なぜ部活はうまくいかないのか」、「なぜ一部の子どもはスポーツを嫌いになるのか」といった疑問を深く掘り下げること、目に見えるあたりまえを疑うのがスポーツ社会学です。

一方、スポーツマネジメントでは、「なぜ」から「どのように」にシフトし、例えばスポーツイベントの運営や観客動員の方法、地域へのスポーツ普及など、具体的なノウハウを学びます。スポーツ政策論では、国民がスポーツに親しむための政策をどのように設計するかを考えます。これらの分野は、相互に関連しながら進化しています。

Q 地域や社会との具体的な関わりについて教えてください。

私は富山県内外でさまざまなプロジェクトに関わっていて、たとえば日本スポーツ協会が主催する国民スポーツ大会（国体）のあり方を議論するワーキンググループの委員を務めています。この大会は、スポーツを通じて国民の生活を豊かにすることを目的としていますが、競技会としての性格が強くなればなるほど多くの課題が挙がってきて、国民の関心を高めるためにも次の大会をどう進めるべきかを検討しています。

また、スポーツ庁の委員として運動やスポーツの実施状況を調査し、政策に反映させる取り組みも行っています。現在、日本では成人の54%が週に1回以上スポーツをしています。これを70%に引き上げるのが国の目標です。特に、オリンピック後にスポーツ参加率が下がる傾向があるため、スポーツを生活の一部として取り入れる方法を考えています。

さらに、部活動の地域移行やスタジアム構想など、地域のスポーツ環境を整えるプロジェクトにも取り組んでいます。スポーツをまちづくりと結びつけ、生活の中に自然にスポーツが存在する社会を目指しています。

Q 学生はどんな取り組みを行っていますか？

学生と一緒にしている活動の一つに、「富山マラソン」の経済効果や社会効果の調査があります。このプロジェクトは、スポーツイベントが地域にどのような影響を与えるかを研究するもので、県のスポーツ振興課からの委託を受けて進めています。学生にとっては重要なフィールドワークの経験となっています。

2023年度の富山マラソンでは、経済波及効果として過去最高19.5億円という結果が出ました。現在進行中の2024年度の調査では、完走者12,000人を対象にアンケートを依頼しています。調査の中では、以下の社会的・経済的效果についても検討しています。

まずは、社会的効果。富山マラソンが県民のスポーツ習慣づくりにどのように寄与しているかを調べています。繰り返し参加するランナーが増えている、特に「県民先行枠」は3分で売り切れるほど、県内での人気が高まっています。また、ふるさと納税者の増加や、曳山などの地域文化が若い世代に浸透している点も注目されています。

Q 富山マラソンは年々盛り上がりを見せていますね。

経済波及効果は国内のマラソン大会の中でも非常に高い水準にあります。スポーツイベントとしてだけでなく、ツー

Q スポーツ社会学の今後の展望について教えてください。

これからのスポーツ社会学では、スポーツを通じて社会課題を解決する具体的な方法を探ることが求められます。たとえば、地域の高齢化や少子化に対応するため、スポーツを活用したコミュニティづくりが重要です。また、スポーツ政策の観点から、障がい者スポーツやユニバーサルスポーツの普及にも力を入れていきたいと考えています。

さらに、スポーツを通じたキャリア教育も重要なテーマです。アスリートのデュアルキャリア支援や、スポーツを活用した地域振興の仕組みづくりなど、スポーツを多面的に捉える研究を進めていきます。



神野 賢治 准教授  
(かみの けんじ)  
学術研究部教育学系  
体育・スポーツ領域 准教授

福岡大学スポーツ科学部、早稲田大学スポーツビジネス研究所、金沢星稜大学人間科学部などを経て、2014年より富山大学勤務。日本スポーツ協会「3巡目国スポ検討プロジェクト」副班長、スポーツ庁「スポーツの実施状況等に関する世論調査」検討委員、富山県サッカー協会「サッカースタジアム建設特別委員会」委員などを務める。

富山マラソンでの実走調査



# まちなか再編事業「filプロジェクト」が グッドデザイン賞受賞！

久保田善明教授の発案で2022年12月に誕生した学生シェアハウス「fil(フィル)」。富山市中心街の空きビルを活用し、まちなかに学生の居住を促すことで、街の活性化に結びつけようという本プロジェクトの「仕組みのデザイン」が評価され、グッドデザイン賞を受賞しました。久保田教授に受賞への思いや今後の展望などについて伺いました。



久保田教授

## ーこのプロジェクトのきっかけや、発案に至った背景は？

私は都市デザイン学部設立に関わるため2016年の秋に富山大学に移ってきました。すでに富山市はコンパクトシティ政策の成功モデルとして都市計画分野では有名でしたが、まちなかの活気が十分でないことや、まちなかに若者の姿が少ないことは、持続的なまちづくりをしていくうえで大きな課題だと思いました。そこでまちなかの空きビルを学生向けのシェアハウスに改修することで、中心市街地の活性化と学生の学びの機会を同時に創出できないかと、富山市民プラザさんに相談したのがきっかけです。

## ープロジェクトの特徴や特に工夫した点は？

単に住むだけでなく、まちづくり活動に関わることを入居条件としています。また、この取り組みに賛同いただける企業からなる「サポートクラブ」(現在約40社が加入)を組織し、学生たちのチャレンジを経済面や、物品・サービス、機会提供などの面から強力にサポートしていく仕組みをつくり、「まちぐるみ」でプロジェクトを育てていけるよう工夫しました。

## ープロジェクトを進めるにあたり、学生や地域との協力関係について教えてください。

filが単なる空きビルだった頃から、持続的なまちづくりに興味がある学生を募ったワークショップを開催し、名称含め、コンセプトを固めていきました。地域との協力関係については、先ほどの「サポートクラブ」を中心に、学生企画のサポートや、企業経営



者と語る会、新聞への記事連載などを行っています。サポートクラブ以外にも、近隣の商店などとの連携も増えています。

## ー学生が地域と学び合う中で、特に身につけてほしいと思うことは？

学生には、地域とのつながりを通じて、視野を広げ、主体性と協調性、そしてオープンなマインドを身につけてほしいと思っています。地域のさまざまな課題に対して、傍観者ではなく、積極的にコミットしていくことの大切さに気づいてほしいと思います。

## ー地域との連携で印象に残っている出来事があれば教えてください。

年末の餅つき大会も面白かったですね。filの学生だけでなく、地域の方々や子どもたち、通りすがりの方々などが一緒になって杵と臼で餅つきを楽しみました。filがすっかり街に馴染んでいる様子が印象的でした。

## ー今後さらに取り組みたいことについて。

filを実現する過程でさまざまな法制度の問題にも直面しました。それらは国土交通省に相談するなどして、より使いやすい制度となるよう働きかけをしています。空きビルや空き家の増加、中心市街地の活性化は全国的な課題でもあり、filの仕組みが全国の取り組みのヒントになればと思っています。富山でも、今後、できれば第2号、第3号の実現を目指したいと思います。



株式会社北陸テクノソリューションズ  
株式会社 i ソフト  
代表取締役 **松浦 洋一**

富山大学  
**OB**  
インタビュー

# NO LIMITS. 人生は、可能性しかない。

五福キャンパス中央図書館2階に足を踏み入れると、ネーミングライツパートナーのサイン「iSoft #NO LIMITS ZONE」が目飛び込んでくる。「限界なんてない。」この言葉を心に宿し、何歳になっても自分のその先へ挑戦し続けているのが、松浦洋一さん(45歳)だ。現在、経済学部夜間主コースに通いながら、県内で二つのIT企業を経営しており、現状に甘んじず、変わることを楽しむ生き方が、学生たちの心をも動かしている。

## 挑戦しつづけた日々が、今の自分になっている。

松浦さんは福井県坂井市出身。富山大学理学部地球科学科時代は地質学を専攻していた。「子供の頃から岩石や鉱物が作り出す美しさや地球の偉大さに惹かれて。理学部時代は地質調査に夢中になり、1ヶ月間山に籠もることも当たり前。気象庁で働くことを夢見て日々学んでいました」卒業後、富山市内のIT会社に就職しシステムエンジニアとしてキャリアを積む。気象庁の夢が諦めきれず、国家公務員試験には28歳まで毎年挑んだ。

## 地域とつながって学び、一緒に成長していきたい。

2022年、経済学部経営学科へ入学。「経営は実践でしか知らない。きちんと学んで経営の選択肢を増やしたい」と挑戦を決めました。週5日、朝3時半に起床して4時半からオフィスへ。夕方まで社長業をこなし、大学で21時まで講義を受ける。「昔から朝が一番集中できる。勉強と仕事の両立は大変ですが、家族の応援もあり楽しく学んでいます」経済学部岸本壽生教授のゼミでは企業の経営戦略や組織づくりを学ぶ。「社員モチベーションや人事評価など経営に直結する学びがうれしい。会社の成長

「年齢制限の28歳で初めて一次に合格。結果ダメでしたが、全力を出し切った経験が今の僕を支えています」

35歳で独立。ソリューション事業の「(株)北陸テクノソリューションズ」(株)「iソフト」の二社を経営する。留守電やFAXのデータを音声認識AIでテキスト化するクラウド型サービス「お留守居くん」(特許3件取得)をはじめ、独自のシステムを開発。「発想はいつも顧客の困り事から生まれる。システムを作って終わりではなく、お客さまのビジネスの成長につながるサービスを生み出したい」

につなげて、近いうちに株式上場 海外進出にも挑戦したい」

卒業後は修士課程に進む。現在は、再入学の目的の一つだった学生との協働による起業に向けて始動中。「若い頃と違うのは地域の中で学び、学生や企業とともに成長したいと思うこと。地域のために仕事をしたいという思いが強いですね」

信条の「#NO LIMITS」は、富大ネーミングライツ事業におけるキャッチコピーに掲げた。「若い人にもっと挑戦を楽しんでほしい。人は無意識に自分の限界を作るが、それを突破しないと成長できない。かなえない夢があれば行動してみる。考えるのは後でいい。だって人生、可能性しかないんだから」。その言葉に迷いや疑いは微塵もない。自分を超えていけというメッセージは学生たち、そしてこのま



福井県坂井市出身。理学部地球科学科卒業後、県内IT企業へ就職。その後キャリアアップを目指し県内外のIT企業で勤務。2015年に独立し、2017年に「(株)北陸テクノソリューションズ」を設立。2020年、(株)iソフトをM&Aにより完全子会社化。2022年、富山大学経済学部経営学科(夜間主)に入学。令和元年度「富山市ヤングカンパニー大賞優秀賞」、令和4年度「富山市ヤングカンパニー大賞優秀賞」を受賞。